

電気化学反応の基礎 深める

電気化学会（東京都千代田区）は、電気化学の基礎・応用研究を推進し産業技術に寄与することを旨とする。電池や水素、半導体の分野のほか生物工学なども含まれ研究対象は幅広い。高山茂樹会長（旭化成顧問、前副社長）は「電気化学反応の基礎研究を深めていかないとサステナビリティ（持続可能性）は実現できない」と強調し、2023年の設立90周年に向けて学会の認知度向上に取り組み、産業界の課題や今後の重点施策について聞いた。

—電気化学の領域はといった電気効率を一般にはイメージしにくく使われる技術（材料）を研究している。

「化学反応（材料）例えばエネルギー問題と電気領域の接点において再生可能エネルギーを貯める電池や電気分解が、これをくり出す解による水素、半導体とことから、水素や電

電気化学会会長 高山 茂樹氏



「日本の科学技術基礎の弱体化を指摘する声があります。『インベーションに關して基礎を成す部分がない』という。基礎研

設立90周年へ認知度向上

「弱くなっていると思える部分を深めないと安全で安定した再生可能エネルギーは実現できないし、化石燃料からの脱却はできない。化学でつくる2050年」という。企業などでは応用・実用の領域に目が向いていて余裕がないようだ。基礎研

「23年の90周年に向けた重点施策は。『当学会は規模がそれほど大きくなく、産業界において知名度が落ちてきていると感じる。100周年の10年後に向け準備するステップ。学会としては珍

い試みです。 会員でノーベル賞受賞者の吉野彰先生や、光の寄付でまかなうの 触媒の第一人者であるが一般的。今回はもつ 藤嶋昭先生を紹介すると幅広いステークホル ーの関心を持ってもら えるPRする。『変わ らうのが狙い。CFの る。きっかけになれば ページを通して、名譽と思っ

使いやすい再生エネ実現

電池や水素だけでなく、生物も電気化学反応で生きているから研究対象となる。これからの自動車や生活インフラなどを支えるエネルギーの転換には不可欠な研究だ。学者中心の組織に見られがちだが、多くの企業会 員も参加しており、「使いやすい再生可能 エネルギー」の実現に向けて連携をさらに 強化することが求められる。

（編集委員・井上雅太郎）

記者の目

後に向け準備するステップ。学会としては珍